

2. 技術研究「危急時と雪崩対策」について

雪崩対策用具

山本 一夫

冬山を志す者として、積雪や雪崩に関する知識を事前に勉強し身に付けて登山することは必須であるが、それでも雪崩は予告なしに起きる場合がある。いくら冬山登山の経験が豊富でも、自分に雪崩が襲い掛かって来ないという保証はない。言い換えれば、積雪期において登山者は、雪崩に遭遇するものと想定して行動すべきであろう。

不幸にして雪崩に巻き込まれ埋没した場合、埋められて「20分」を経過すると、生存確立はおよそ「 $\frac{1}{2}$ 」以下になると言われている。これらのことを踏まえて、埋没「15分」以内に埋没者の位置を特定し発見すれば、100パーセントに近い確率で生還する筈であるが、次に紹介する雪崩対策用具の必携なくしては、それは不可能である。

まずあげられるのは、「アバランチ・ビーコン」(雪崩埋没者探知器)であるが、欧米では山岳スキーヤーを目指す人達を中心に携帯が常識とされている。使用法など詳細は、「登山研修、VOL.8-1993」を参考にされたい。二つ目は「携帯用ショベル」で、小型で600g以下と軽量であり、弱層を調べるためのトレンチを掘ったり、ショベル・テスト等に使用でき用途も広がる。メーカーによってはスキーと組合わせて、危急時に簡易ソリになるタイプもある。最後は「携帯用ゾンデ棒」(雪中に差し込み埋没者を探索する棒)で、アルミニウム製、外径が11mmで折り畳み寸法40cmのポール8本組の、スチールワイヤーで連結されたコンパクトなものである。重量も416gと大変に軽量である。

以上に紹介した用具は、「三種の神器」と言われ、現時点でこれらを越える携帯用の雪崩対策用具は他に見当たらない。しかし、いくら優れた用具でも使いこなすためには、日頃のトレーニングが肝要である。「アバランチ・ビーコン」で埋没者を最初の「10分間」で特定し、残り「5分」は「ゾンデ棒」で探りながら、「ショベル」で掘り出す手順を反復練習すれば、「埋没15分」での発見は可能である。そして実際には、これら「三種の神器」を個人装備として「必携」すべきであろう。

忘れてはならない小物に「雪崩ひも」(毛糸やポリプロピレンのひも20m以上)、「ルーベと黒色プラスチック板」(10cm角)がある。黒プレートに雪を乗せて、ルーベで雪の結晶状態を観察する。「雪温計」は雪温の推移を見るためである。

人間は頭で知識として憶えたことを、実際に体験して体で覚えていくことが必要であるが、雪崩に遭遇することは、絶対に体験してはならない。「三種の神器」を携帯することで、雪崩を回避できるわけではないが、少なくとも雪崩に対しての意識の向上につながることは間違いないだろう。

(日本山岳会員)